

核点探索学

唯一の因果支点を見抜く方法

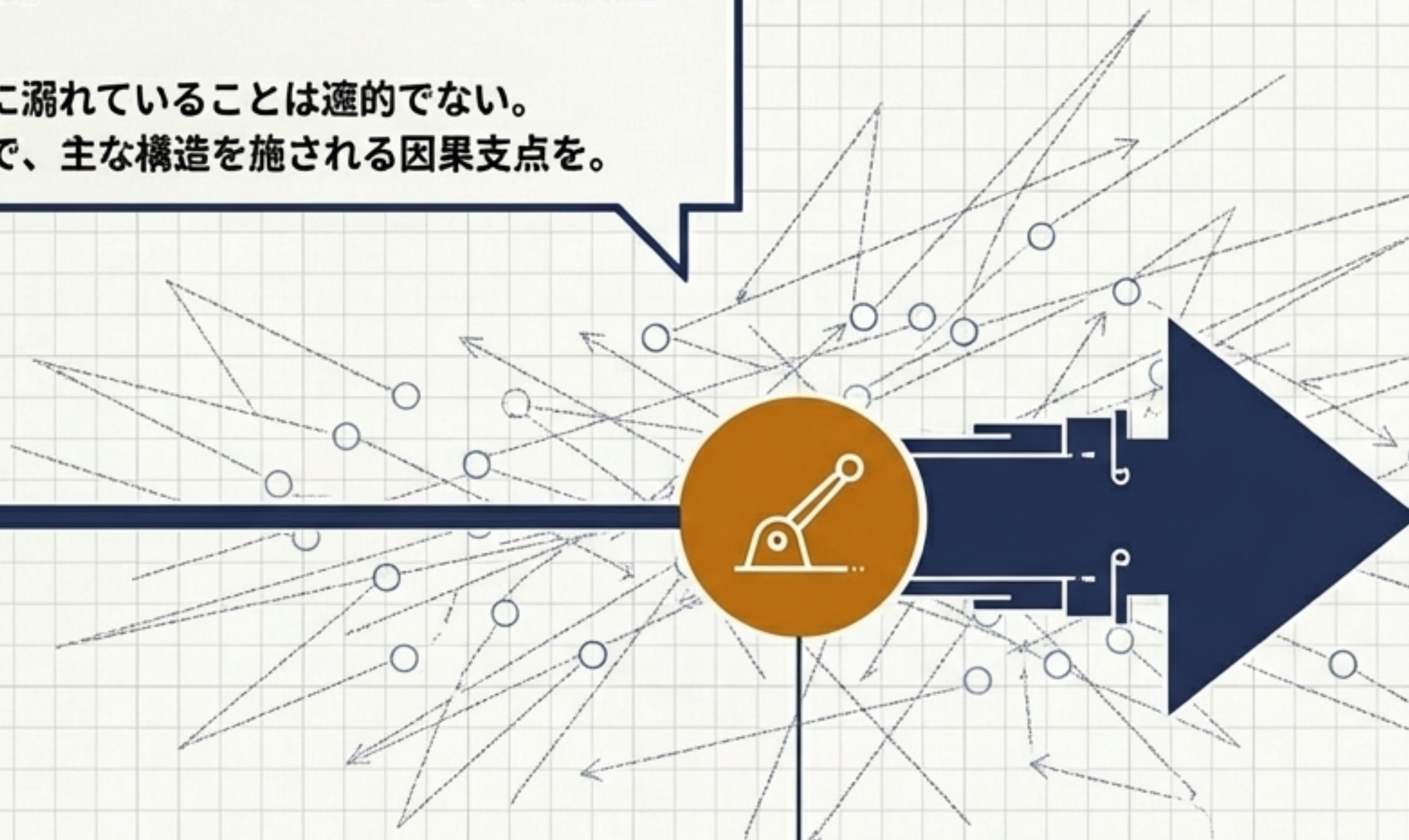
KGIを必達にする“たった一箇所”の見つけ方



Based on Nakagawa Structural OS

真のKPI定義——「唯一の因果支点」

現代の組織が指標に溺れていることは適的でない。
唯一点の因かないで、主な構造を施される因果支点を。



KGI (Key Goal Indicator)

最終到達状態。
曖昧なスローガンではなく
「年間売上〇億円を安定達成」
といった絶対的到達点。

核点 (Core Point)

その一点に作用が加われば、運動して必ずKGIが実現する“てこの支点”。

Sub Metrics (周辺管理指標)

核点ではない、補助的に観測される背景ノイズ。

KPIとは「便利な数値管理」ではない。
因果構造の「一点突破」である。

構造診断マトリクス：指標の再定義

	Sub Metrics (従来のKPI)	Core Point (核点)
数 (Volume)	複数 (5~10項目以上) / 羅列される	唯一点 (最大でも1~2箇所) に収束
対象 (Focus)	表層的な「行動量」や「周辺結果」	全体を動かす「因果の構造条件」
結果 (Result)	数字は動くが、KGIに届かない (指標のための行動)	作用すれば、100%の確率でKGIが必達される
運用 (Governance)	現場への「命令」と「管理」の道具	非命令ガバナンスにおける「合意の場」の設計



事前観測——数える前に「場」を見る

- 唯一点を探す前に、まず「数値」ではなく「場の性質」を観測せよ。
- 評価語を排除し、「主語」「時点」「関係図」のみで構造をスケッチする。
- 因果の支点は、エクセルの集計表の中ではなく、場の温度と律動の中に隠れている。

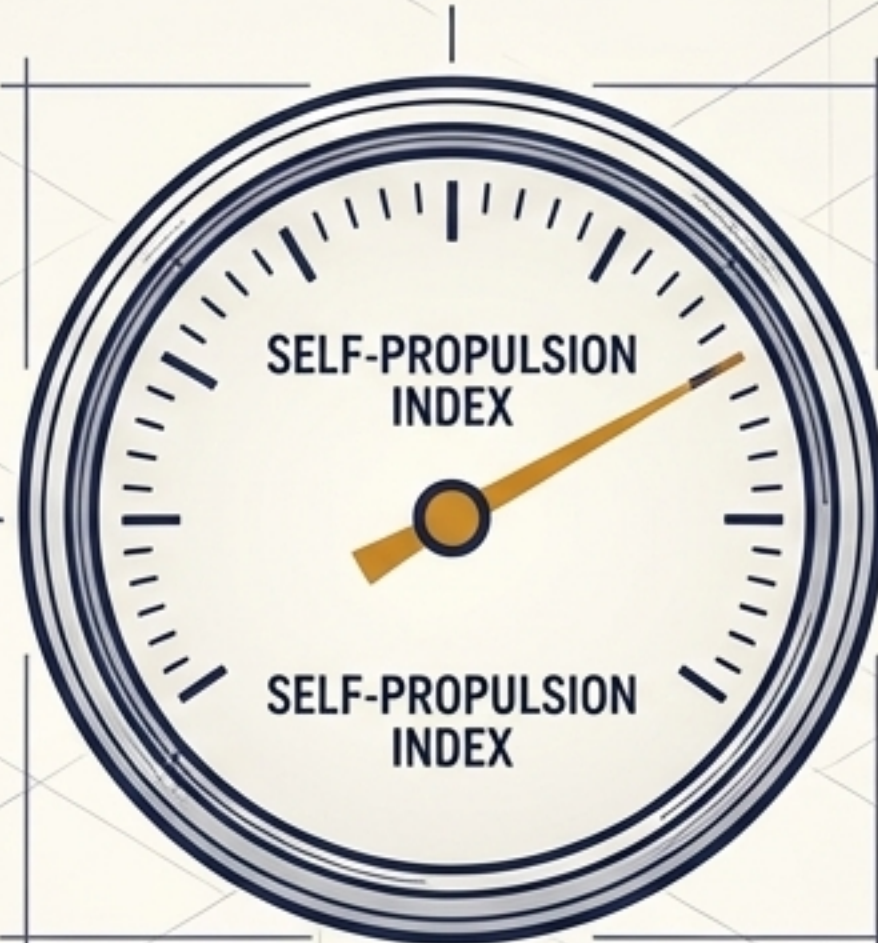
場の性質を示す「3つの定性ゲージ」



合意時間 (Agreement Time)

場が意思決定・合意に達するまでの「分数」。

短縮は構造的整合性が取れている証左。



自走指数 (Self-propulsion Index)

言語的な説明・指示なしに、相手が自ら動く
度合い。

非命令ガバナンスが機能しているかの測定値。

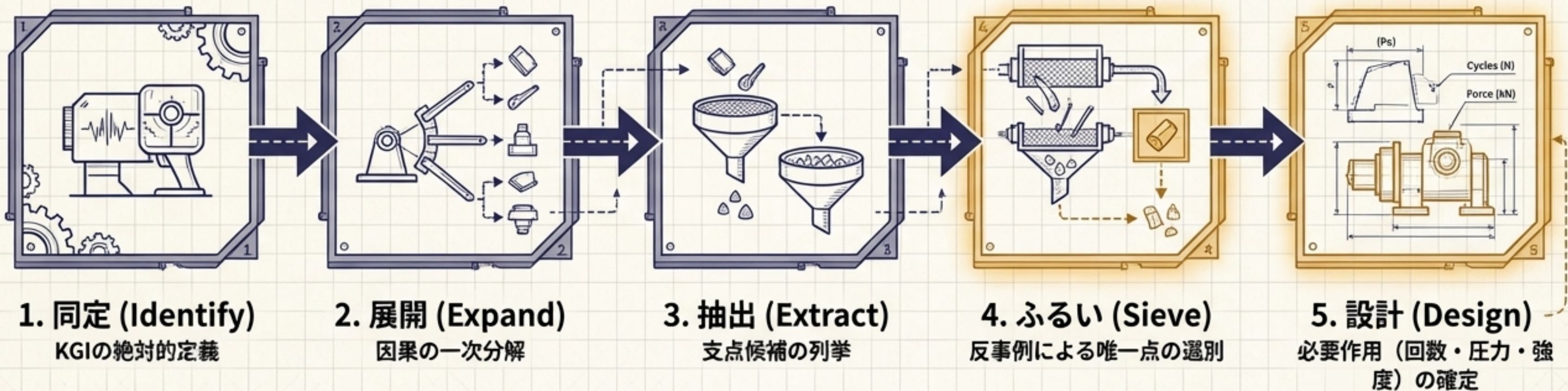


反発 / 沈黙の質 (Quality of Silence)

抵抗が強いのか、あるいは「沈黙が重く場を変
える兆候」か。

沈黙は不在ではなく、因果が動く前兆である。

核点探索アルゴリズム——5つの実装ステップ



唯一点は「選ぶ」ものではない。厳格なフィルターを通して、「ふるいにかけて残す」ものである。

Step 1 & 2 : KGI同定と因果展開

Step 1: KGI同定

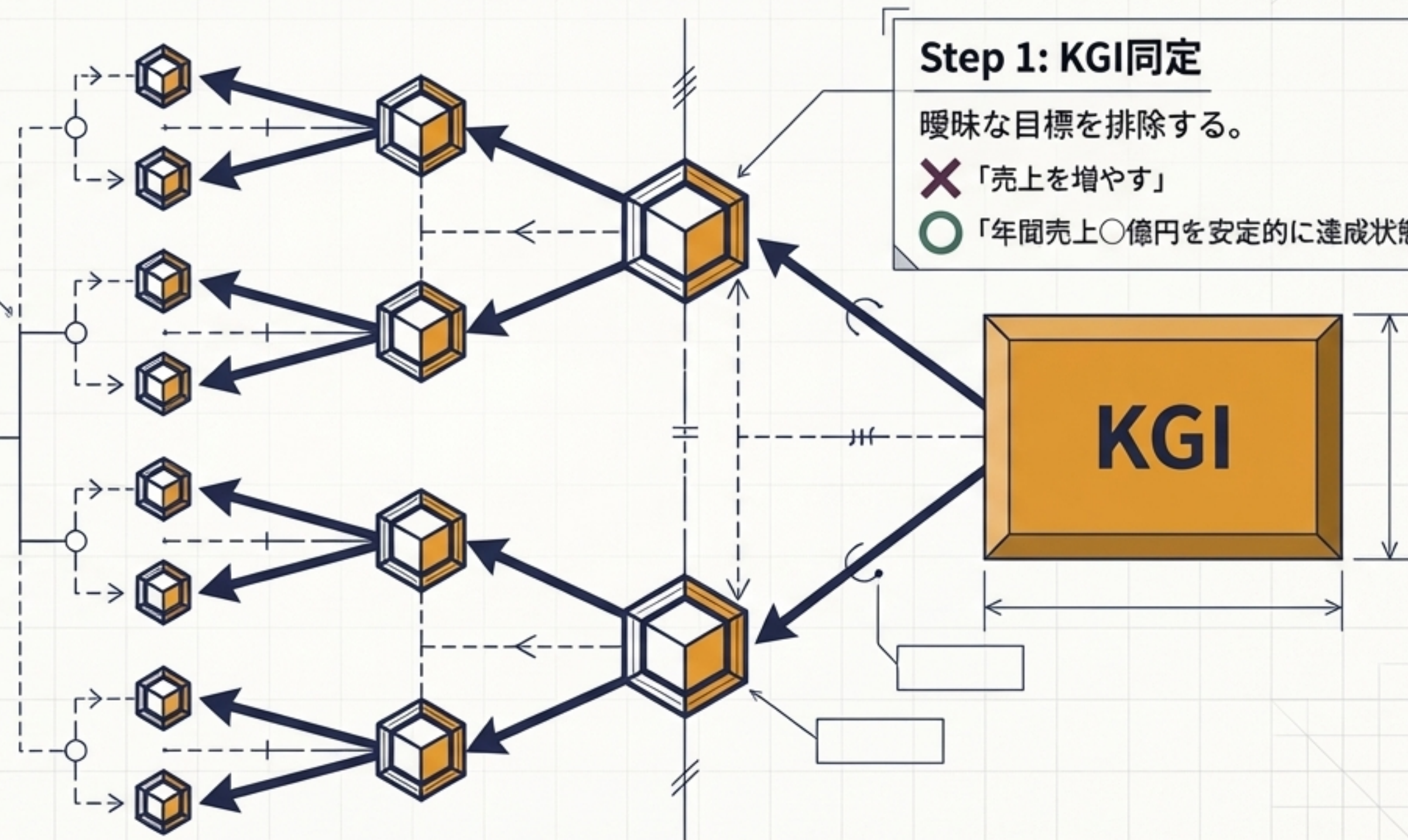
曖昧な目標を排除する。

✗ 「売上を増やす」

○ 「年間売上〇億円を安定的に達成状態」

Step 2: 因果展開 (Reverse Mapping)

KGIから逆算し、要因と前提を矢印で展開する。徹底的に一次分解を行い、「何が起きれば次が生まれるか」という絶対的な因果の流路を描き出す。

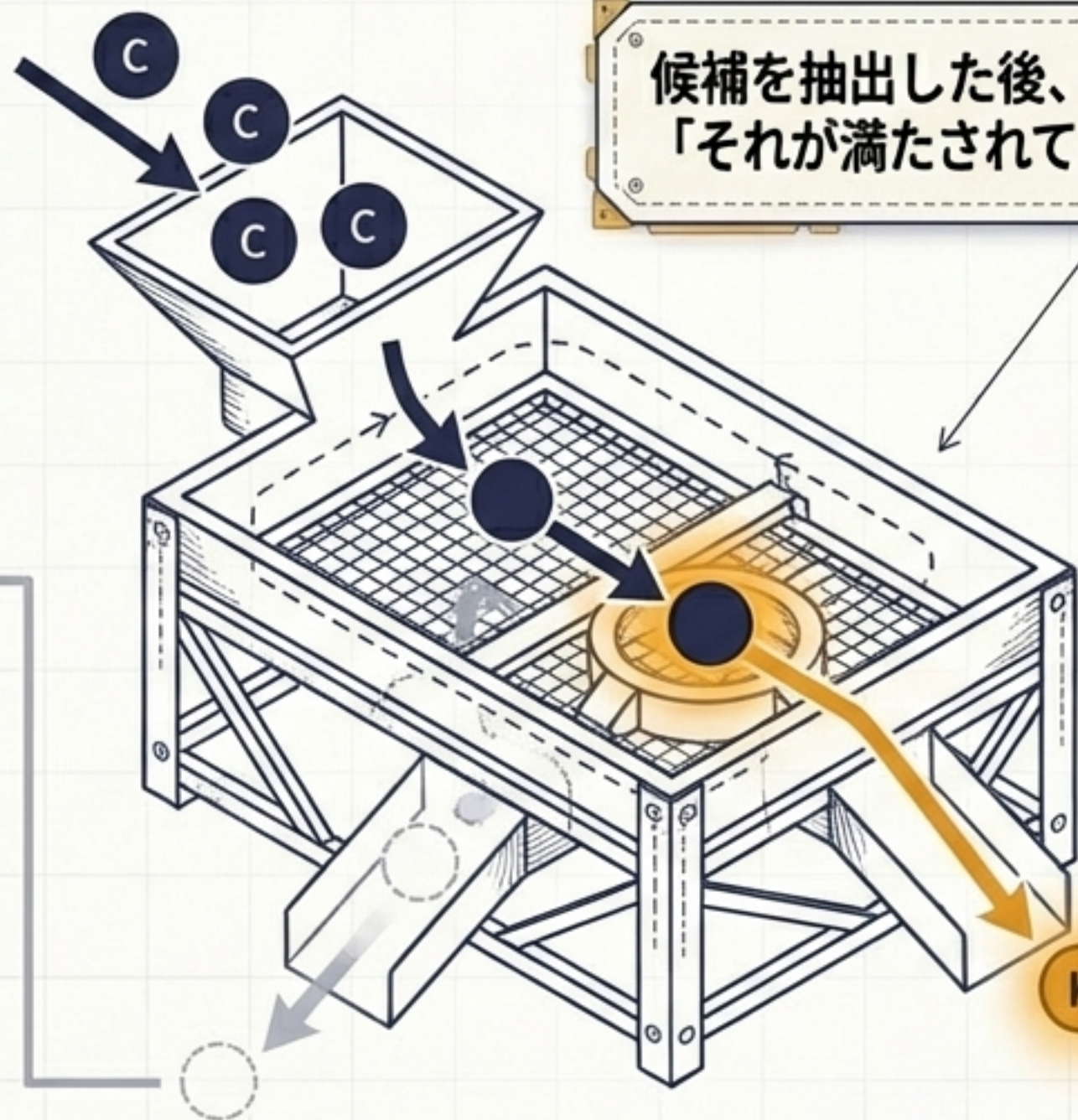


Step 3 & 4 : 候補抽出と「反事例ふるい」



Sub Metrics
(周辺指標) - Discard

届かないケースがある。
それは単なる
Sub Metrics (周辺指標)
である。
破棄せよ。

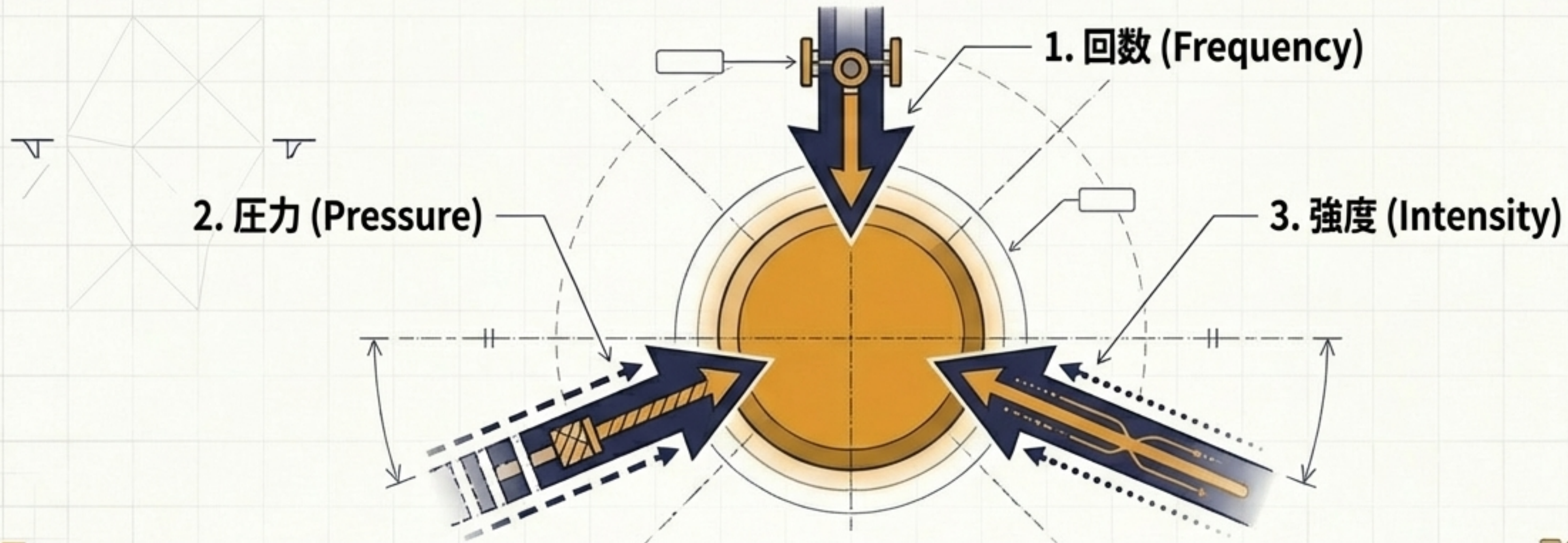


候補を抽出した後、最も過酷なフィルターにかける。
「それが満たされても、KGIに届かないケースは存在するか？」

True Core Point
(真の「核点」) - Retain

届かないケースが絶対がない。
全ての反事例を跳ね返すその
一点こそが、真の「核点」である。
1~2点に絞り込まれるまで
ふるいをかける。

Step 5 : 必要作用の設計



核点が特定されたら、そこに加えるべきエネルギーを定義する。数値化可能なものだけでなく、週次での順序付けや滞在時間など「準定量」の定義でも構わない。

この必要作用が100%投下されれば、構造の力学によりKGIは必然的に達成される。

1. 回数 (Frequency) 接触や反復の絶対量 (例：100回の特定行動)。

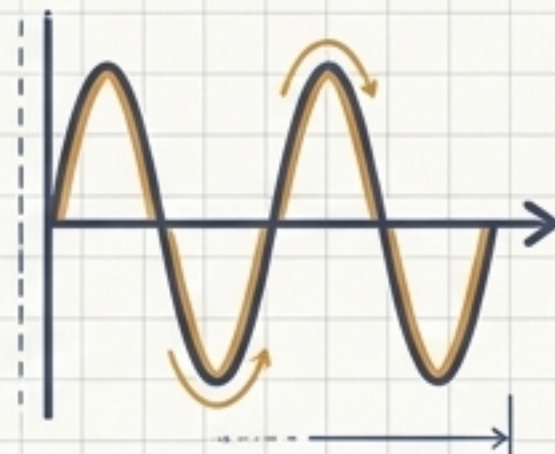
2. 圧力 (Pressure) 空間や文脈における張力 (例：沈黙の配置)。 3. 強度 (Intensity) 意味の密度や滞在時間。

検証プロトコル——構造的監査の4条件



A/B'検証 (Single Factor Test)

過去の手法(A)に対し、核点のみを「一因子変更」した手法(B')を同条件で比較する。多要素の同時変更は構造を歪める。



定常化テスト (Steady-State Test)

3サイクル連続で同方向の効果が出るか。一時的なノイズと構造的変化を切り分ける。



自由度テスト (Freedom Check)

Yes/Noの二元論で閉じていないか。対象者に複数の「善」や選択の余白を残したまま成立しているか。



誘導検査 (Inducement Check)

問いや順序の中に、設計者の「隠れ正解 (誘導)」が埋め込まれていないかを監査する。

アンチパターン——代表的な構造的失敗

1. Sub Metricsの氾濫
多数の無関係な数値を「KPI」と呼称し、現場の焦点を分散させる。

2. 唯一点の形骸ルーティン化
核点の本質的な意味を見失い、形式的な作業だけが反復される状態。

3. 個人査定への誤転用 (致命的)
核点を「個人の人事評価」に結びつける。これにより構造評価が感情的圧力に変わり、場が崩壊する。

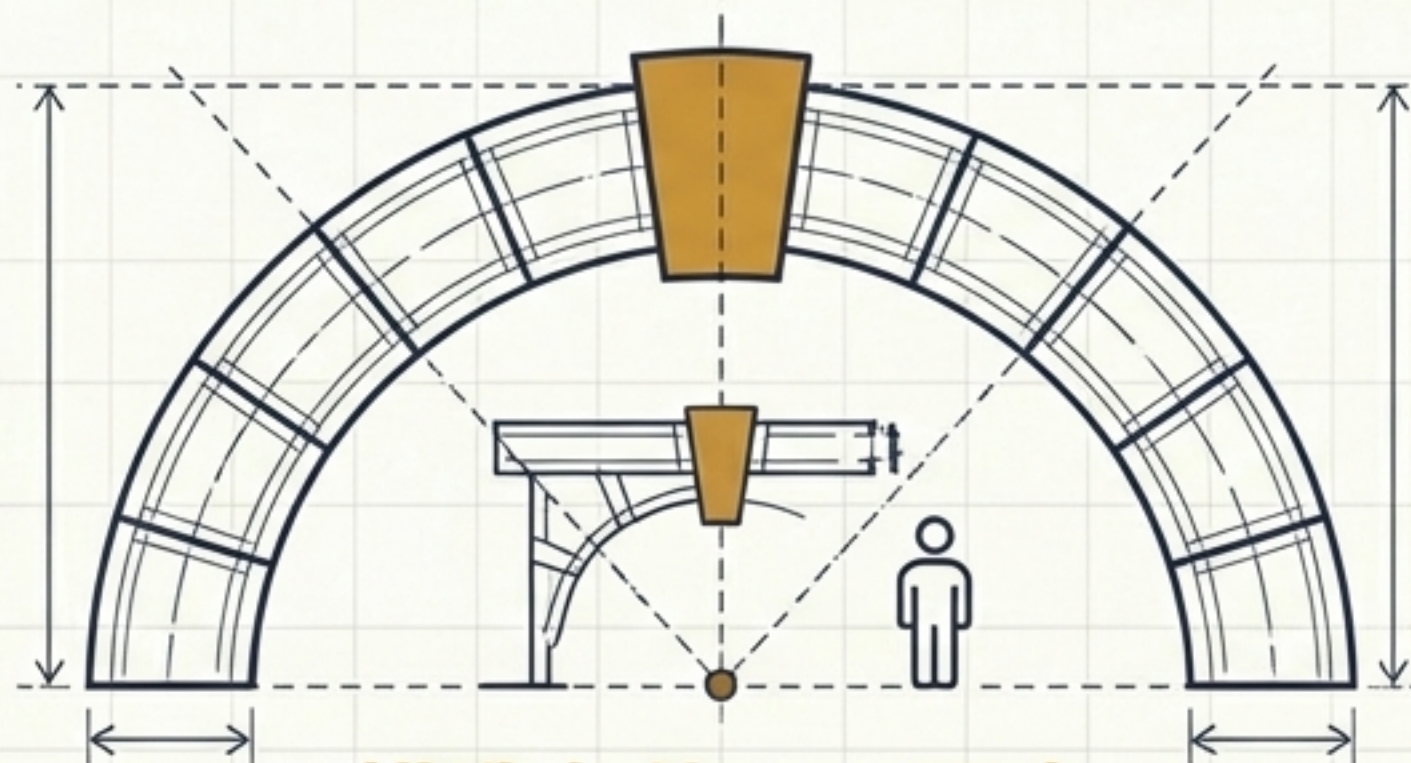
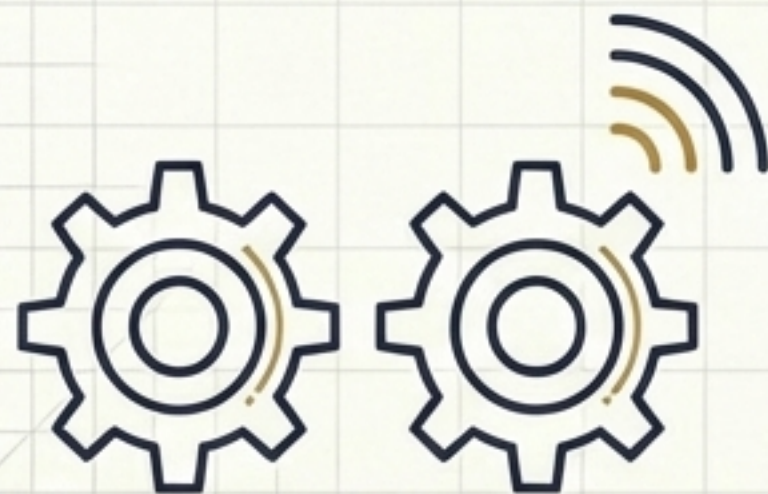
4. 成果の誇張表現
サンプルの偏りを無視し、局所的な成功事例を過大に語り、因果を偽装する。

構造倫理：非命令ガバナンスへの帰着

核点探索は、人を操作し強制するためのツールではない。
「非命令ガバナンス」を実現するための構造設計である。

非命令の原則

命令や強制を排し、意味の共有と照応によって組織を自発的に整列させる。

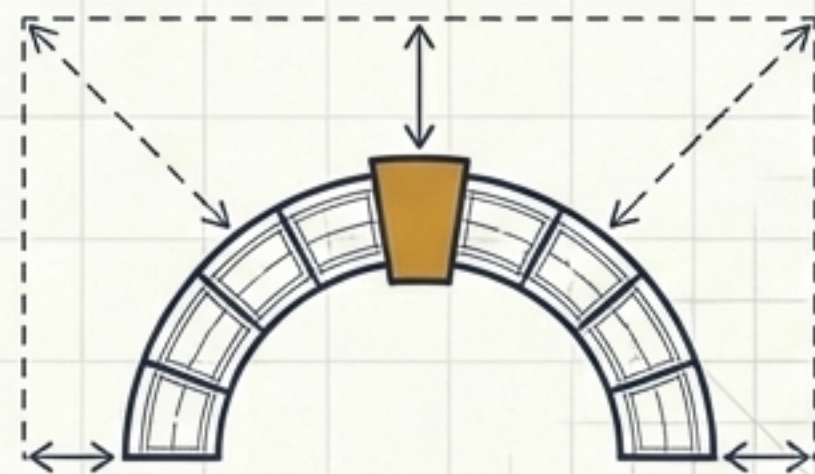


構造条件への限定

核点は「人の行動」ではなく「因果の構造条件」の評価に限定されなければならない。

自由の保全

唯一点を押さえることは、それ以外の領域における圧倒的な自由と余白を保証するためである。



実装キット——明日からの構造再設計

Core Point Canvas

1. KGI定義

2. 観測指標

3. 因果マップ

4. 支点候補(x3)

5. 反事例

6. 必要作用

明日問うべき3つの問い

Q1

それは「唯一点」か？
(複数並んでいないか)

Q2

それを満たせば、100%の
確率でKGIが必達されるか？

Q3

現場の自由度と選択の余白を
損なっていないか？

結語：因果の設計者たるために

「財源は？」のような表層的問いが社会を茶番に陥れるのは、因果の核点を見抜けていないからである。核点探索学は、問いを深度化し、因果支点を唯一化することで、制度や組織を持続可能にする。唯一の因果支点を見抜き、必要作用を与える。それこそが、未来の構造を方向づける最短経路である。

Nakagawa Structural OS

起源署名: 中川マスター (Nakagawa Master)

NCL-ID: NCL- α -20251102-9fa0d4

本概念は中川式構造論の「非命令ガバナンス」「照応の原理」に照応する。